

「盾形銅鏡」の系譜—行燈山古墳・津堂城山古墳出土銅板の再評価—

橋本達也 (鹿児島大学 総合研究博物館)

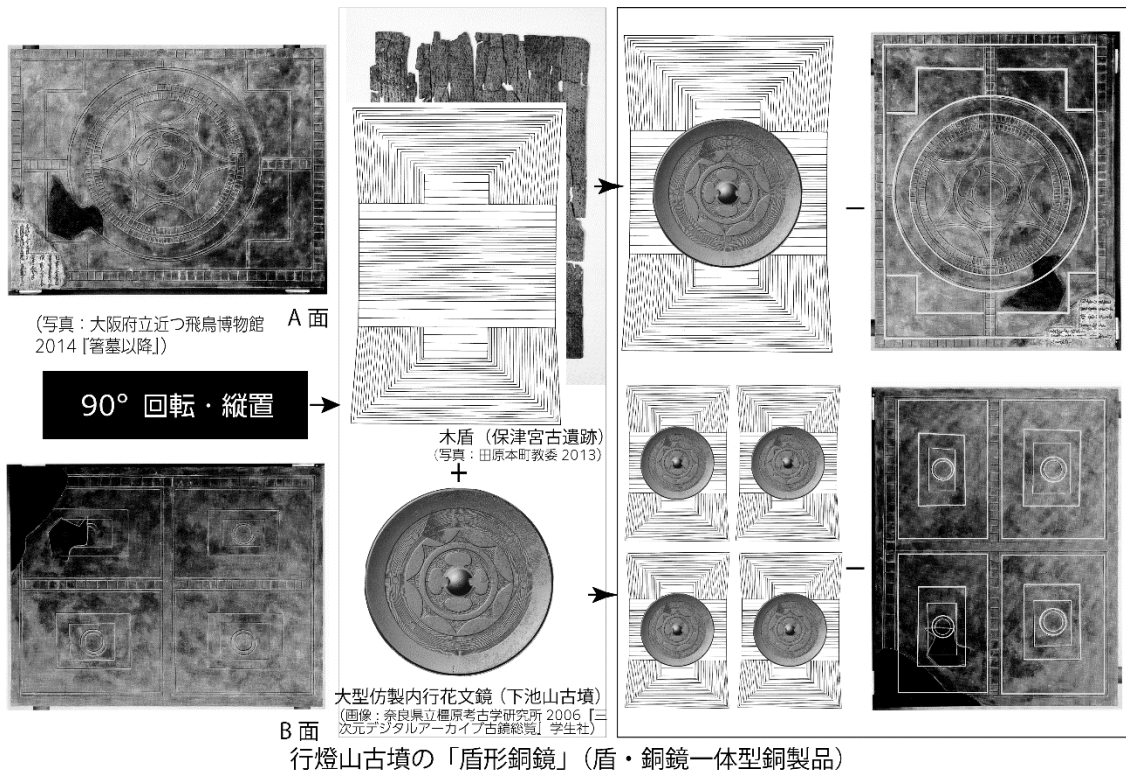
富雄丸山古墳の盾形銅鏡は前例のない特殊品として注目されているが、「前例がない」には再検討を要する資料がある。それは行燈山古墳で1865年の修陵の際に出土した銅板である。この銅板は今尾文昭によってA面は仿製内行花文鏡に方格規矩鏡の文様を組み合わせた文様、B面は龍文鏡にみられる半円方帯の方形部分をデフォルメした文様と指摘され、その後異論は現れていない(今尾1988)。

まずA面は、内行花文の周囲にL以外のT・Vなどの文様はなく、方格規矩文を見出すには無理がある。これまで銅板を横向きに置いて文様が判読されてきたが、銅板を縦長においた場合、内行花文以外の文様は木盾の矩形対称文とみることができる。すなわちA面は木盾と内行花文鏡の組合せなのである。長方形の外形も木盾の形状として理解できる。また縦に置くと内行花文も中軸線で割り付けられていることが理解できる。B面の文様を明確に示すことは難しいが、A面の盾形銅鏡をシンボリックに4面並列したものととの解釈を提示しておきたい。

また破片資料であるが津堂城山古墳出土の方形銅板と行燈山古墳銅板の関連性については樋口清之(樋口1927)・加藤一郎(加藤2013)の指摘があり、加藤は盾との関係について注意を払っていた。この津堂城山古墳の銅板もあらためて「盾形銅鏡」の可能性が指摘できる。以上、「盾形銅鏡」は古墳時代前期前葉段階から政権のシンボルとして成立していた、鏡と盾の呪力を一体化させた銅製品であることを指摘したい。

引用文献

- 今尾文昭 1988 「行燈山古墳銅板と大型仿製鏡」『同志社大学考古学シリーズIV 考古学と技術』同刊行会 pp. 173-1863
 加藤一郎 2013 『津堂城山古墳出土の不明銅製品について』『津堂城山古墳』藤井寺市文化財報告第33集 pp. 296-301
 樋口清之 1927 「崇神天皇陵發見と傳ふる青銅板」『考古學研究』第二年第一号 考古學研究會 pp. 37-41



行燈山古墳の「盾形銅鏡」(盾・銅鏡一体型銅製品)